

## プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』（2）

### Poerbatjaraka's *Kepustakaan Djawa* (2)

青山 亨、増井美佳 訳

Toru AOYAMA, Mika MASUI

#### 訳者まえがき

本稿は、『東京外大東南アジア学』第20巻（2015年）に掲載された「プルボチャロコ『古典ジャワ文学史入門』（1）」の続きである。プルボチャロコ（Raden Mas Ngabei Poerbatjaraka）が1952年に出版したインドネシア語版『ケプスタカアン・ジャワ』（*Kepustakaan Djawa*）を底本とし、同じくジャワ語版『カプスタカアン・ジャウィ』（*Kapustakan Djawi*）を適宜参照して、日本語訳を作成したものである。

インドネシア人のためのジャワ文学史概説という原書の性格を考慮し、日本語訳作成にあたっては、原書を全訳した上で、日本の読者に必要と思われる最低限の説明を訳註で補っている。

翻訳の経緯や原書および著者については第1編「プルボチャロコ『古典ジャワ文学史入門』（1）」の「訳者まえがき」を参照していただきたい。

第2編である本稿では、原書の第3章「新しい時期の古ジャワ語文献」と第4章「中期ジャワ語の発達」を訳出した。第3章は、前編の第1章と第2章とあわせて古ジャワ語文献を対象とし、第4章は、次回に掲載予定の第5章とあわせて中期ジャワ語文献を対象としている。本編の収録作品は20点で、成立時期はおおよそマジャパヒト王国の盛期から末期までである。原書の残り43点を対象とする第5章「中期ジャワ語の韻律詩」、第6章「イスラームの時代」、第7章「初期スラカルタ時代」については、引き続き公表する予定である。

なお、第1編の英題 *Peorbatjaraka's Kepustakaan Djawa* (1)に誤字があった。正しくは *Poerbatjaraka's Kepustakaan Djawa* (1)である (eoではなくoe)。訂正のうえお詫びしたい。

また、第1編で訳出した第1章および第2章に関連する主要な研究成果として以下のものを追記しておきたい。

Creese, Helen

2005 *Women of the Kakawin World: Marriage and Sexuality in the Indic Courts of Java and Bali*. London.

Mollen, W. van der

2015 *H. Kern Rāmāyaṇa: The Story of Rāma and Sītā in Old Javanese*. Tokyo.

Robson, Suart

2016 *The Kakawin Gaṭotkacāśraya*. Tokyo. (forthcoming)

## 訳文について

1. ジャワ語およびインドネシア語のラテン文字表記について、原著では旧綴りが使われているが、本稿では現行の新綴りに統一した。ただし、旧綴りで刊行された出版物の題名や著者名などはそのままにした（例えば、本書の表記は、新綴りではPurbacaraka著 *Perpustakaan Jawa*となるが、旧綴りのままにした）。
2. 第3章の作品は古ジャワ語で書かれている。古ジャワ語のラテン文字表記については、標準的な翻字方式 (Zoetmulder 1982) に統一した。ただし、ŋ については ng で表記した。サンスクリット語と同様、e と o は常に長母音である（例えば、デーワdewa）。また、母音 ṛ は「リ」とカタカナ表記した（例えば、クリシュナKṛṣṇa、ウリッタサンチャヤWṛttasañcaya）。なお、サンスクリット語由来の v は w で表記されることに留意されたい（例えば、シヴァ神Śiva、ヴィシュヌ神Viṣṇuではなくシワ神Śiwa、ウィシュヌ神Wiṣṇuと表記）。ただし、『ラーマヤナ』の作者ヴァールミーキと『マハーバーラタ』の作者ヴィヤーサについては、原則的にはワールミーキWālmīkiおよびウィヤーサWyāsaと表記したが、ジャワ語では伝統的に w ではなく b で表記されているため、古ジャワ語の作品中に登場人物として現れる場合にはバールミーキBālmīkiおよびビヤーサByāsaと表記した。
3. 第4章の作品は中期ジャワ語で書かれている。中期ジャワ語のラテン文字表記については、原則としてPigeaud (1967-80) の方式に準じている。ただし、ṛ については r、ŋ については ng で表記した。
4. 現代ジャワ語のカタカナ表記については、原則として現代ジャワ語の発音に従った。標準的な現代ジャワ語では、語末の開音節の a は /o/ と発音され、さらに、語末から2番目の音節も開音節の a である場合、その a も /o/ と発音される（例えば、Poerbatjarakaはpoerbaとtjarakaの複合語なので、それぞれこの規則が適用されてPoerbotjarokoと発音されるため、「プルボチャロコ」とカタカナ表記される）。本稿では、現代の人名や地名などについては慣用によって現代ジャワ語の発音に従って表記した。
5. 古ジャワ語の名称と現代ジャワ語の（とくにワヤンにおける）名称が異なる場合でも、統一はせず、文脈で使い分けた。代表例として以下の地名と人名がある：スメールSumeruとスメルSumeru、ラーマRāmaとラマRama、シーターSītāとシントSinta、クリシュナKṛṣṇaとクルスナKṛṣna（それぞれ古ジャワ語と現代ジャワ語）。ただし、ラマをロモ

などと表記することは原則として行わなかった。

6. 原註と訳註を区別するため、原註については註の冒頭で《原註》と表記した。
7. 簡単な訳註については、文の流れを損なわないよう、訳文自体に補足したり、丸括弧で挿入したりした場合もある。
8. 原書では、古ジャワ語文献の作成年代はサカ暦で表示している。サカ暦はインド起源の太陰太陽暦である。サカ暦の年号に78を加えたものが西暦の年号に対応する。イスラーム化する以前のジャワの宮廷で使われており、バリ島では現在も西暦と併用されている。

## 本稿で訳出した章

- |     |                            |
|-----|----------------------------|
| 第3章 | 新しい時期の古ジャワ語文献              |
| 27  | ブラーフマーンダ・プラーナ、カカウイン        |
| 28  | クンジャラカルナ、カカウイン             |
| 29  | ナーガラクルターガマ、カカウイン           |
| 30  | アルジュナウイジャヤ、カカウイン           |
| 31  | スタソーマ、別名プルシャーダ・シャーンタ、カカウイン |
| 32  | パールタヤジュナ、カカウイン             |
| 33  | ニーティシャーストラ、カカウイン           |
| 34  | ニルアルタプラクリタ、カカウイン           |
| 35  | ダルマシューニヤ、カカウイン             |
| 36  | ハリシュラヤ、カカウイン               |
| 第4章 | 中期ジャワ語の発達                  |
| 37  | タントゥ・パングララン                |
| 38  | チャロン・アラン                   |
| 39  | タントリ・カーマンダカ                |
| 40  | コーラワーシュラマ                  |
| 41  | パララトン                      |

## 第3章 新しい時期の古ジャワ語文献

本章では、新しい時期の古ジャワ語文献を取り上げて解説する。これらの文献の特徴の多くは古い時期の古ジャワ語文献の特徴と同じである。

1. 王名の記述があり、碑文などの記録との関係性がみられること
2. 月日もしくは年の記載

3. 言語的作為性<sup>(1)</sup>
4. 古い時期の古ジャワ語文献を典拠として新たに編纂されていること
5. 当時のジャワの状況を語っていること

これらのうち4と5の特徴は古い時期の文献群には見られない特徴である。

新しい時期の古ジャワ語文献のなかで、古い時期の古ジャワ語文献を典拠としているものは、以下の27番と28番の2作品である。

#### 27 ブラフマーンダ・プラーナ、カカウイン<sup>(2)</sup>

この作品は、すでに解説した散文の『ブラフマーンダ・プラーナ』（本書4番）と同じ物語であるが、カカウインの形式で記され、長さも短縮されている。<sup>(3)</sup> したがって物語としては目新しいものはないが、言語的作為性が目に付くので、新しい時期の古ジャワ語文献に分類される。

このカカウイン版『ブラフマーンダ・プラーナ』には、シュリー・プラークリティウィーリヤ（Śrī Prākṛtīwīrya）という年配の女王の名が出てくるが、彼女が何者であり、どの時代に生きていたかを特定できる史料が他にないため、これ以上の説明を加えることはできない。

カカウイン版『ブラフマーンダ・プラーナ』は、ラテン文字に翻字されたものが散文版の作品と合わせてホンダ博士によってすでに出版されている。

#### 28 クンジャラカルナ、カカウイン<sup>(4)</sup>

この作品は、すでに解説した『クンジャラカルナ』（本書16番）と同じ内容の物語だが、カカウインの形式で記されている。物語の内容については新しいとは言えないが、言葉の組み合わせが大変に美しい。読んでみると、まるで宝石で飾られたネックレスを眺めているような気持になる。にもかかわらず、使用されている言葉は特別なものではない。残念なことにこの作品はまだ出版されていない。

次に、最近、一般の人々の間で大変に話題となっている文献について紹介する。

#### 29 ナーガラクルタゲーマ、カカウイン<sup>(5)</sup>

この作品は、ジャワの偉大な王であったハヤム・ウルク（Hayam Wuruk）王が在位していた時代（サカ暦1272年－1311年、西暦1350年－1389年）のマジャパヒト（Majapahit）

王国の様子を記述する。<sup>6)</sup> 内容の大部分は、王のブランバンガン (Blambangan) 地方への巡幸やその帰路におけるシンガサリ (Singhasari、トゥマプルTumapelの別名) での滞在に関するものである。そのほかに、歴史、共食儀礼、集会、国の規則などに関する記述もみられる。<sup>7)</sup>

『ナーガラクルターガマ』が発見される以前は、マジヤパヒトについての物語は『ババッド・ジャワ』(Babad Jawa) と呼ばれる一群の年代記に書かれていることのみに基づいていた。<sup>8)</sup> 『ナーガラクルターガマ』が研究され、石碑や銅板刻文、中国の資料と比較されることで、トゥマプルの王宮 (シンガサリ王国の都) の様子やマジヤパヒト王国の発展についてより明瞭に知ることが可能となった。また、さらに明らかになったことは、前出のほとんどすべてのババッド年代記群は信用しうるものではないということである。

『ナーガラクルターガマ』で使用されている韻律は大変美しく、言語表現も優れている。この作品は、プラパンチャ (Prapañca) の著作で、成立はサカ暦1287年 (西暦1365年) である。本作品の完成当初、プラパンチャはまだ宮廷詩人 (現代ジャワ語でプジャンガ *pujangga*) の見習いであり、ムプの称号を受けてはいなかった。<sup>9)</sup> プラパンチャの父はムプ・ナーデンドラ (Nādendra) という名であり、仏教に関わる監督官 (Dharmadyaksa ring Kasogatan) の役職を与えられた人でもあった。<sup>10)</sup>

本作品はすでに現在では、最初にバリ文字で、二度目にはラテン文字で翻字がなされ、ケルン博士によってオランダ語に翻訳され、それに加えてクロム博士によっていくつかの解説が付けられたものが出版されている。<sup>11)</sup>

ハヤム・ウルク王の統治期にはもう一つの作品が書かれている。それは次の作品である。

### 30 アルジュナウイジャヤ、カカウイン<sup>12)</sup>

物語の中核部分は、すでに解説した『ウッタラカーンダ』(Uttarakāṇḍa) (本書6番) から取られているが、カカウインの形式で書かれている。中心となる物語は、ダシャムカ (Daśamuka) 王が異母兄のワイシュラワナ (Waiśrawaṇa、別名ダナラジャDhanaraja) と戦い、そののちにマヒスパティ (Mahispati) の国王シュリー・アルジュナ・サハスラバーフ (Arjuna Sahasrabāhu) と戦い、ついには捕虜となってしまうというものである。<sup>13)</sup>

この物語は現在では大変によく知られているので、ここではこれだけの解説にとどめ

て十分であろう。

本書の作者はムプ・タントゥラル (Tantular) で、ハヤム・ウルク王の晩年期の頃に書かれたということから、『ナーガラクルターガマ』(本書29番)の後に書かれた作品ということになる。

ムプ・タントゥラルによって書かれた作品にはもう一つある。

### 31 スタソーマ、別名プルシャーダ・シャーンタ、カカウイン<sup>(14)</sup>

以下が物語の粗筋である:ブッダがアスティナ(Astina)国のマハーケートゥ(Mahāketu)王の王子スタソーマ(Sutasoma)として転生する。彼は成人すると大変に信仰に厚く、大乘仏教に専心した。そのため結婚することや王に即位することも望まなかった。ある夜、彼は王宮から抜け出した。閉じられていた門は自然と開いて彼に道を開いた。

彼がいなくなったことが知れ渡ると王国は騒然とし、王や王妃は大変に悲しみ、人々はこれを慰めたのであった。

さて、森に入った王子は、とある寺院でお祈りを始めた。するとそこに女神ウィディユットカラーリー(Widyutkarālī)が現れ、王子の祈りは聞き届けられたと告げた。その後、王子は数名の僧侶たちに案内されてヒマラヤ山に登った。山の中腹で、ある修行場に着くと、その修行場についての言い伝えと、ラークシャサ(Rākṣasa、羅刹)王の化身で人喰いを好む王がいるということを教えられた。その王の名はプルシャーダ(Puruṣāda)あるいはカルマーシャパーダ(Kalmāśapāda)という。<sup>(15)</sup> 以下はこの王にまつわる話である:ある日、王の食事のために用意された肉が犬と豚に食われてなくなってしまった。<sup>16</sup>料理人は困惑し、代わりとなる肉を探したが、見つからなかった。仕方なく、彼は死体の遺棄場に出向き、ついさっき亡くなったばかりの人の遺体の太腿から一塊の肉を切り取り、これを調理した。王はこれをとても美味しく味わって食べた。なぜなら彼はラークシャサの化身であったからである。王は食べ終わると、「先ほど供された肉は何の肉であったか」と料理人に尋ねた。正直に答えないと刑罰に処すると脅かされた料理人は、先ほど供した肉は人肉であったと答えた。王が人肉を好んで食べたため、国民は食べられてしまうか、さもなくば他国に避難してしまい、王国からいなくなってしまう。その後、王は神の思し召しによって足に不治の傷を負ったあげくに、ラークシャサになりはてて森の中に住みつき森の主となった。ある時、王は、足の傷が治るのであれば、カーラ(Kāla)神に対して生け贄として100人の王を捧げることを誓った。

さて、スタソーマは、僧侶たちからこの王を倒すよう要請を受けたが、それに応じようとはしなかった。すると、地底から大地の女神プリティウィー (Prthiwī) が現れ、同じくカルマーシャパーダ王を殺すよう請願したが、スタソーマはあくまでも拒否したのであった。そればかりか、彼はそのまま修行をするために旅路を進み続けた。すると道中で、象の頭を持ち、人肉を好物とするラクシャサと遭遇した。スタソーマはこのラクシャサの餌食になることを自ら進んで引き受けた。しかしこのラクシャサは襲いかかろうとしたとたんに倒れてしまった。というのはスタソーマにのしかかられると、まるで山のように重く感じられたのである。象頭のラクシャサは敗北を認めると、仏門に入り、殺生をしてはいけないという教えを受け入れ、ついにはスタソーマに信服して、その弟子となった。さて続く旅路では、一匹の蛇が王子の前に姿を現し、襲いかかろうとしてきた。象頭のラクシャサはこれを捕まえようと、蛇の前に飛び出した。蛇はラクシャサに巻き付いてきたが、スタソーマの神通力により力をなくして地面に落ちた。するとこの蛇もスタソーマの弟子となった。そののち、一行が峡谷にたどり着いたとき、一頭の雌虎がわが子を餌にしようとしているところに遭遇した。スタソーマは母虎がしようとしていることを止めに入った。それに対しこの母虎は、一頭の鹿も得られず空腹に耐えかね、自分の子を餌にしようとしたのだと言った。それに対してスタソーマは「食べるのであれば私を食べなさい。子どもがかわいそうだ。」と言った。雌虎は荒々しく吠え、王子に襲いかかり、胸に噛みついて、満足のいくまで血を吸った。すると雌虎は自分の体が、アムリタを飲んだ時のように爽快になったのを実感した。<sup>(17)</sup> しかし、自らの行いが大変な悪行であることに気づくと後悔の念に駆られ、スタソーマの死体の足元で泣き伏し、あとは死を望むばかりであった。

そのとき、インドラ神が現れ、王子を甦らせた。王子は、せっかく安楽の境地に入っていたのになぜ生き返らせたのかとインドラ神を非難した。インドラ神の答えは、もしも王子が生き返らず、雌虎がそれを悔やんで死んでしまえば、残された虎の子に乳をやるものがいなくなり、その子も死んでしまうであろう。そうなれば王子の慈愛も手助けも無駄になってしまう、というものだった。

こう答えてインドラ神は姿を消した。この後、王子は弟子たちに教えを説いた。

そののち、スタソーマはある洞窟の中にただ一人で入り、瞑想修行を始めた。『アルジュナウィワーハ』(本書17番)と同様に天女たちによる誘惑があったが、スタソーマの心は惑わされなかった。インドラ神自身も見目麗しい美女に化身して現れたが、スタ

ソーマは一切惑わされることなく、それどころか、自らワイローチャナ（Wairocana、大日如来）の姿に化身した。そのとき、神々が降臨してスタソーマに礼拝を行った。その後、スタソーマ王子の姿に戻ると、山から下りた。

一方、スタソーマ王子のいとこのダシャバーフ（Daśabāhu）王は、カルマーシャパーダ王のラークシャサの軍勢との戦の最中であつた。敗れたラークシャサたちがスタソーマ王子のもとに助けを求めて駆け込んだ。ダシャバーフ王が追いかけてきて、スタソーマにも攻撃を加えた。やがて、面と向かって戦っているのが自分のいとこであると知つたダシャバーフ王は、スタソーマを自分の国に招き、自分の妹の婿として迎え入れることを申し出た。祝宴をおえると、スタソーマ王子はハースティナ（Hāstina）国へ帰都し、子をもうけ、王に即位してスタソーマ王と称した。一方、プルシャーダ（カルマーシャパーダ）王はすでに99人の王を捕え、牢屋に閉じ込めていた。生贄として捧げる100人まで残すところあと1名であつた。そこで、シンハラ（Singhala）国に赴き戦を仕掛けたが、相手の王はその戦で戦死してしまい、生け捕りにするに至らなかつた。<sup>(18)</sup>

プルシャーダ王はその後、僧侶に変装し、ウィダルバ（Widarbha）国へ赴いて王に謁見した。これは『ラーマーヤナ』（本書2番）において、ダシャムカ王がシーター姫を誘拐するとき僧侶に変装したモチーフと類似している。ウィダルバ国王を捕えることに成功すると、100人すべて揃つたので、カーラ神に捧げられたが、カーラ神は彼らを食べようとしなかつた。なぜなら、ハースティナ国のスタソーマ王を食べることを望んでいたからである。そのため、プルシャーダはハースティナ国に戦いを挑み、ハースティナ国に避難していた王子たちと戦つた。ついにはスタソーマ王自身がプルシャーダと対峙することになった。スタソーマは相手に対してただ忍耐力をもって受け流すだけで、ついにカーラ神のもとへと連れていかれた。スタソーマ王は、ほかの100人の王たちの解放を条件に、カーマ神の餌食となることに同意した。カーラ神はこの申し出を聞いて大変に感服し、プルシャーダさえもこのスタソーマ王の潔い自己犠牲を見て感動を覚えた。その結果、プルシャーダは改心して、2度と人肉を食べないことを誓い、捕えた100人の王をすべて解放した。

『スタソーマ』はマジヤパヒト王国のハヤム・ウルク王の治世に書かれたとされる。『ナーガラクルターガマ』（本書29番）と比較すると、『スタソーマ』の方が後代に記されたものである。

この『スタソーマ』のもととなる物語の原作はインドで非常に有名なものである。こ



の物語は『ラーマヤナ』や『マハーバーラタ』の中ではだけではなく、仏教文献にも見られる。<sup>(19)</sup>

### 32 パールタヤジュナ、カカウイン<sup>(20)</sup>

作品中には時代や王の名前についての情報は記述されていないが、使用されている言語からみて『スタソーマ』(本書31番)や『アルジュナウィワーハ』(本書17番)と同世代のものと結論づけられるため、すでに述べた諸作品とともにこの章で触れておかなければならない。

また、作品の哲学思想という点でも、『パールタヤジュナ』は、マジヤパヒト王国の中期から後期にかけて書かれた諸作品と同じ特徴があることが示されている。さて、この作品は、サイコロ賭博に負けて以後のパーンダワ (Pāṇḍawa) たちの暮らしを物語っている。以下がその物語の粗筋である：

パーンダワたちはサイコロ賭博でコーラワ (Korawa) 側に負けると、コーラワたちによって侮辱をうけた。ドロパディー (Dropadī) はシャクニ (Śakuni) により身ぐるみはがされ、髪の毛を鷲掴みにされ、ハースティナの王宮に集う王たちの前に差し出された。<sup>(21)</sup> その後、12年の間、森林への追放に処された。

ユディシュティラ (Yudhiṣṭhira) が住むための場所を相談すると、ビーマ (Bhīma) はもはやコーラワ相手に一暴れするのみと主張した。なぜなら、生死は運命の定めであり、辱めを受けて生きながらえる必要はないというのであった。結局、パーンダワたちは、アルジュナ (Arjuna) に瞑想修行に赴かせるということで合意した。

アルジュナはインドラキーラ山 (Indrakīla) へと出発し、その途中でワナワティー (Wanawatī) の森にある聖者マハーヤニー (Mahāyanī) の修行場に立ち寄った。さらに旅路を続けているとき、アルジュナは、インドラプラスタ (Indraprastha) 王宮の繁栄の象徴である女神シュリーと出逢った。<sup>(22)</sup> 彼女はユディシュティラの不相応な振る舞いが原因で、王宮を立ち去ったのであった。しかし、アルジュナの説得により、今後は王宮で適切な供養を受けることを条件に王宮へ戻ることに同意し、アルジュナに様々な助言を与えたのち、姿を消した。

続いて、アルジュナはカーマジャヤ (Kāmajaya) 神に出会い、大変に有益な教えを授かった。さらにカーマジャヤ神は、ナラマラ (Nalamala) という三つの頭 (象の頭、ラークシャサの頭、ガルダの頭) を持つラークシャサが災いをもたらすであろうという忠

告を与えた。様々な助言を与えたのち、カーマジヤヤ神も姿を消した。

大きな湖のほとりに到着するや否や、忠告のとおりアルジュナはナラマラというラークシャサに遭遇した。ラークシャサは凶暴な勢いで襲いかかり、とどまることを知らなかった。アルジュナが瞑想に専念すると、その姿は神のような様子となった。

ラークシャサは恐れおののいて、将来カリ・ユガ (kali yuga) の時代が訪れたときに再び会いまみえようと捨て台詞を吐いて、大慌てで逃げ去った。

アルジュナはさらに旅を続け、聖者ビヤーサ (現代ジャワ語ではアビヤサAbiyasa) の修行場に辿り着いた。アルジュナは聖者に近づいて挨拶をして、兄のユディシュティラ王からインドラキーラ山で瞑想を行うようを命じられたという趣旨を伝えた。聖者ビヤーサは、アルジュナに数々の助言を与え、インドラキーラ山の場所を教えた。こうしてアルジュナはインドラキーラ山で瞑想を行ったのである。<sup>(23)</sup>

『パールタヤジュナ』の作者は明らかでない。しかし、作品の冒頭部には「ウイドウヤットマカ」(Widuyatmaka) という人名と思われる記述がある。以下がその部分である。

*Sang Widuyatmaka ring langö kawi wĕnang tuludana sauritnirengsabha*

しかし、この意味は、「優秀な詩人は多くの者にその作品を模倣される。」である。したがって、「ウイドウヤットマカ」という単語は人名ではなく、一般的な表現なのである。

先ほど述べた粗筋からも見て分かるように、基本的に『パールタヤジュナ』は物語の筋をほとんど言ってよいほど含んでおらず、ただ、修行に向かうアルジュナの旅立ちを語るところだけである。このような特徴はこの時代の作品では一般的になっている。『アルジュナウィジャヤ』(本書30番) や『スタソーマ』(本書31番) も同様であって、これらの作品では何よりも教理を説くことが最優先にされており、それに機知や美しい描写が付随しているのである。

したがって、これらの作品を読むと、物語の進行が脇道に逸れていくような、あるいは、引き伸ばされていくような印象を持つことになる。

たしかに比較的古い作品であっても教理がある場合や、多く含まれたりする場合もあるが、物語を語る事が中心であるように見える。教理を含む部分も新しい時代の作品と比べて多くはない。むしろ、古い時代の作品であっても引き伸ばされていくような、あるいは、脇道に逸れていくような印象をあたえる部分があるが、一般に、そのような部分の大部分は後代の挿入や、追加であることが明らかである。<sup>(24)</sup>

以下に解説する諸作品では事情は異なっており、単に教理を説く内容であって、物語

を語るものではない。これらの作品を次のとおりである。

### 33 ニーティシャーストラ、カカウイン<sup>(25)</sup>

この作品に収められている教理は断片的である。一般的に、一つの詩節において一つの内容が語られる。以下はその例である：

#### 「毒について」

学問を修めることは、怠け者や無気力な者や学問を好まざる者にとって毒である。

(体内で) 消化されない食べ物は、体にとって毒となる。なぜなら病気を引き起こすからである。

人の集まりは貧乏人にとって毒である。彼が話すことは何であれ(耳を傾ける人はいないし、それどころか) 耳障りなだけである。

美しい乙女は、毫碌した老人にとって毒である。なぜなら老人たちの行いは何であれ乙女に嫌悪感を引き起こすからである。

#### 「中身について」

水がめというのは、(水が掻き出されて) いっぱいでないときは、中の水がピチャピチャと揺れるが、いっぱいになると落ち着く。

牛というのは、その鳴き声が大きく、強く、長く延びるときは、搾れる乳が少ない。

人というのは、顔立ちが不細工であると、気まぐれで、たくらみ多く、口数も多い(それというのも、格好良く見せようとするからである)。

人というのは、学問が足りないと、話し方も粗野で、頑固で、不愉快である。

#### 「才能について」

残念なことに、富貴なる者というのは、もし才能がなければ、いくら若くても、美貌でも、健康でも、一言で言えば、何もかも満ち足りていても、知識がない故に、その者の顔色は暗く、輝くことがない。あたかも、カポック (kapok) の木の花が赤茶色で香りがないように。<sup>(26)</sup>

おおよそ以上のようなものが続く。バリとジャワにおける『ニーティシャーストラ』

は10詩章83詩節からなる。しかしジャカルタ博物館に所蔵される版では、15詩章120詩節からなる。

この作品はすでに何度か『ニティサストラ・カウィ』(Nitisastra Kawi) または『パニティ・サストラ・カウィ』(Paniti Sastra Kawi) の書名で出版されている。最初の出版は P. P. ロールダ・ファン・エイシंगा (P. P. Roorda van Eysinga) によるもので、本文は赤字のジャワ文字で、現代ジャワ語の注釈は黒字で印刷された。エイシंगा版『ニーティシャーストラ』は本文に誤りが多く、注釈もまったく使用に耐えない。

1871年にオランダ政府の指示により、再び出版が行われた。この1871年版はエイシंगा版と構成がことになっており、注釈と意味が添えられている。しかし、本文に誤りが多い点ではエイシंगा版と大差がない。さらに、1871年版には新しく挿入された部分がある。すなわち、第1詩章第4詩節における *ri wahyaning masa-kala* 以下の部分、10節bcd行における *yyan tapa subrata* 以下の部分である。また、ジャワ神秘思想において非常に有名な表現が新しく挿入されている。すなわち *sura sudira jayanikang rat syuh brasta tēkaping ulah darmastuti* の部分である。これは、日常会話や『ウィタラディヤ』(Witaradya) 第29詩章第3詩節では *sura dira jyaningrat lēbur dening pangastuti* という表現に変わっている。<sup>(27)</sup> これらのほかにも挿入文が数多くみられる。

この1871年版『ニーティシャーストラ』はコーヘン・スチュアート第8番として知られる『ニーティシャーストラ』の写本のもとになった。これは古ジャワ語本文、現代ジャワ語、意味の3段から構成されている。もし筆者の誤りでなければ、本文は故ロンゴワルシト (R. Ng. Ranggawarsita) の手によるものである。<sup>(28)</sup> したがって、上述した挿入部分も同氏によるものだと推測される。

このほか、ジョグジャカルタのマルディムルヤ (Mardimulya) によって出版された『ニーティシャーストラ』もよく知られている。出版の年は定かではない。表紙には *Sērat Nitisastra, kabangun awit saking karsanipun prabu Surya-anyakrakusuma* (スルヤ・アニャクラクスマ王の命によって編纂された『ニーティシャーストラ』) とある。しかし、実のところ、この版は1871年版の内容をまったく変えることなく再版したものである。また、私の知る限りでは、このスルヤ・アニャクラクスマ王というのはマタラム王国のスルタン・アグン王 (在位1613–45年) の称号である。しかし、スルタン・アグン王がマルディムルヤに出版させることはあり得るだろうか。仮に、マルディムルヤが出版元でないとすれば、本来の出版元は、どのように、何を根拠としてこの作品がスルタン・アグン王

の時代に編纂されたことを知りえたのであろうか。これについては読者諸氏の判断に任せることとする。

実のところ、『ニーティシャーストラ』の作者は明らかになっていない。原本から残っているテキストの言語的特徴を観察することで、およそマジヤパヒト王国の末期に書かれたものであるとの結論を得ることができる。このことは特に言語的の作為性からみて明らかである。

なお、『サリディン』(Saridin)には、『ニーティシャーストラ』がムプ・ウィダヤカ(Widayaka)、すなわちアジ・サカ(Aji Saka)によって書かれたと述べられている、これはまったく荒唐無稽であり、考慮するに値しない。

現在では、15詩章120詩節で構成される『ニーティシャーストラ』が、ラテン文字の翻字、オランダ語の翻訳に簡単な解説を付けたものが出版されている。

ここでは『ニーティシャーストラ』についての解説を長々と連ねたが、それはこの作品がかつてジャワにおいて大変によく知られた作品だからである。学校制度が整う以前のスラカルタにおいて、本書は人生の基本的指針としてジャワ人にふさわしい書とされていたのである。

ここで、ほかの作品について語るべきときがきたようである。

#### 34 ニルアルタプラクリタ、カカウイン<sup>(29)</sup>

この作品は、神秘主義と呼ばれる古い教え、つまり修練の教えを含んでいる。作品の内容を知ってもらうために、作品からの引用をいくつか挙げることにする。良い性格の人間についての説明に続いて、悪い人間について以下のように説明される：

多くの人間の性格はこのような良い人間の性格と異なる。彼らは自分の満足と利害のみを第一に考える者である。この種の人間は普通、他人の賢明さをにくみ、賢さで自分を超越する者はいないと吹聴する。自分自身の大きな過ちは人に知れないようにしっかりと隠すが、他人の誤りが少しでもあらわになると、それを大げさに言い立てるのである。

その上、他人が災難にあうのを面白がる。人の幸せをねたむので、苦難に陥るよう、あら探しをするのである。高潔で信仰厚い人を笑いの種にし、悪事は当然のごとく責め立てる。瑕疵を追及されると激怒し、褒められると喜色満面でうれしがる。

人を侮辱することにかけては手管に長けていて、すでに徳が高く誉れ高いと認められている人に対しても猜疑の目を向け、喜んで善行を積む人を非難することをやめようと

いう気持ちは少しもないのである。発する言葉は傲慢で人を侮蔑するものである：「神を探し求めて四苦八苦し、考えが定まらず右往左往している人は、混乱した愚か者だ。不運なるかな、何が本当に正しいかを未だ知らない者は。」

以上が『ニルアルタプラクリタ』からの少しばかりの引用である。このほかにも、神秘主義について書かれている部分があり、端的に言えば、とてもよく書かれており、明晰で、分かりやすい文章である。

この作品はサカ暦1381年（西暦1459年）にスラバヤ南部の、宗教施設の置かれていたカンチャナ（Kancana）村で書かれた。作者の名前は知られていない。

### 35 ダルマシューニャ、カカウイン<sup>(30)</sup>

この作品も哲学的な教えや神秘主義思想を含んでいるが、著者は古ジャワ語に熟達しておらず、そのため文章に崩れたところが多い。単語の中には新しい語形、すなわち現在のジャワ語の語形になっているものが多く見受けられる。韻律もしばしば規則から逸脱している。

本書の神秘主義思想の要点は、メール山にまつわる神秘思想と呼ぶことができるものである。<sup>(31)</sup> 以下はその一部である：

*Batara Siwah = Suwung*

*Sipatipun ingkang kasar awujud donya, kaanggĕp wangun rĕdi.*

*Yen karingkĕs dados Meru (rĕdi Himalaya)*

*Yen karingkĕs malih dados Meru (kados ing tanah Bali)*

*Yen karingkĕs malih dados tiyang.*

訳：

シワ神は無である。

そのカサル（物質的）な特性は世界として具現する。それは、山としてそそり立つことなのである。

これがさらに小さくなるとメール山（ヒマラヤ山）になる。

またさらに小さくなると（バリにある）メール山になる。<sup>(32)</sup>

ますます小さくなると人間になる。

以上は、カサル（粗雑で、物質的）な事柄についての記述であったが、アルス（洗練された、玄妙）な事柄についての以下のような記述もある：

*Batara Siwah = Suwung*

*Sipatipun ingkang alus, inggih punika alusing donya.*

*Yen karingkēs dados alusing rēdi Meru.*

*Yen karingkēs malih dados alusing Meru.*

*Yen karingkēs malih dados alusing manusa.*

訳：

シワ神は無である。

アルスなもの特性とは、これすなわち、世界のアルスさである。

これがさらに小さくなるとメール山のアルスさになる。

またさらに小さくなると（バリの）メール山のアルスさになる。

ますます小さくなると人間のアルスさになる。

この二つの文章が示していることは、人間とは本来、世界の縮小型であり、それは大世界と同じ形をしており、両者ともシワ神の本質によって満たされていると語っている。

このほかにも美しい文章がある。以下に訳出してみよう：

綿は細切れとなって、人の手により、チンツ布、縞柄布、柄布、木綿布など様々な形に姿を変えられる。このようにして様々な形になったものが、人々に賞賛される。基本が素晴らしければ、どのような形をとっても素晴らしい。これらはすべて、綿が人の手によってさまざまな形に姿を変えられたものだということを、もはや誰も知らない。

この作品の作者は明らかでない。マリナータ（Mallinātha、インドの人名）という人物の名をあげる者がいるが、これは作者ではなく、この教訓詩を唱った師匠のことであるようだ。

結末の部分にはチャンドラ・サンカラの記述も見られる。<sup>(33)</sup> しかしこのサンカラは深遠すぎて意味が不明である。千の位、百の位までの数字は明らかだが、その次のŚruti=4が十の位を示すのか一の位を表すのか定かではない。要するに、この作品の年代は、サカ暦1304年または1340年（西暦1382年または1418年）である。

古代からマジャパヒト王国時代までの古ジャワ語文献の解説は、次の作品で最後になる。

### 36 ハリシュラヤ、カカウィン<sup>(34)</sup>

『ニーティシャーストラ』(本書33番)や『ニルアルタプラクリタ』(本書34番)とは異なり、この作品は教訓詩ではない。内容はすでに多くを述べたように、『ウッタラカーンダ』(本書6番)に取材した物語である。以下はその粗筋である：

マリ (Mali)、スマリ (Sumali)、マルヤワーン (Malyawān) のラークシャサの三兄弟はいずれも強大な力をもつ王であった。いつものように彼らの軍隊は修行場を壊していた。やがて、マリとその兄弟たちはインドラ神の天界を征服しようと企むようになった。

インドラ神をはじめとする神々は困惑し、シワ神に助けを求めた。しかし、シワ神は救いの手を差し述べることができず、ウィシュヌ神に助けを求めよと告げた。ウィシュヌ神は攻め込んできたマリたちを撃退し、ついにマリとマルヤワーンを戦場で打ち破ったが、スマリだけは海の底に身を隠して逃げ延びた。<sup>(35)</sup>

古ジャワ語で書かれた文献の解説としてはこの『ハリシュラヤ』を最後の作品とする。作品中にチャンドラ・サンカラ (スンコロ) で *Sad sanganjala candra* = サカ暦1496年 (西暦1574年) と年代が記されているからである。<sup>(36)</sup> なお作者は不詳である。



## 第4章 中期ジャワ語の発達

中期ジャワ語で書かれた諸文献を解説する前に、まず中期ジャワ語の発生について説明しておく。大まかに言って、中期ジャワ語と呼ばれているものは、古ジャワ語と現代ジャワ語の間で使用されていたものである。この言語はマジャパヒト王国の発展期に発生した。<sup>(37)</sup>

以下で解説するものは、中期ジャワ語の散文の形式で書かれた文献である。

### 37 タントウ・パングララン<sup>(38)</sup>

散文で書かれている作品である。古い作品と言ってよいが、使用されている言語から判断すると、中期ジャワ語文献に区分される。

以下は物語の粗筋である：グル(Guru)神はジャワの地に一組の人間の男女を創造し、やがて子孫が殖えた。しかし、彼らはいまだに裸であり、話すことも、住居を建てることもできない状態であった。そこで、グル神は神々に命じて、ジャワの地に降臨させ、話すこと、衣服を着ること、家を建てること、道具を用いることやそのほか諸々の教えを人間たちに授けさせた。

さて、物語で語られている時代には、ジャワの地は位置が定まっておらず、揺れ動いている状態であった。そこで、グル神は、スメール山をインドからジャワ島へ持つてくるよう神々に命じた。<sup>(39)</sup> そこで、スメール山の山頂を切り取って、ジャワの地まで担いで運んだ。ところがその山頂がジャワ島の西側に落ちたので、ジャワ島は傾いて、東側が高くなってしまった。そこで、山頂はさらに東側へと運ばれたが、その途中で崩れ落ちた部分が、それぞれカトン(ラウ)山、ウィリス山、カンブツ(クルツ山)、カウイ山、アルジュナ山、クムクス山となった。そして山頂は(ジャワ島の)スメル山となった。<sup>(40)</sup> これでようやくジャワの地は位置が定まり、揺れ動くことはなくなったのである。

また、蝕の起源に関してもここで語られる。この物語は、すでに解説した『アーディ・パルワ』(本書7番)の中の乳海攪拌の物語の翻案である。

また、ウィシュヌ神が降臨し、ジャワの地の初代の王、カンディアワン(Kaṇḍiawan)王となり、マンガクハン(Mangukuhan)、サンダン・ガルバ(Saṅḍang Garba)、カトウン・マララス(Katung Malaras)、カルン・カラ(Karung Kala)、ウルティ・カンダユン(Wrēti Kaṇḍayun)の王子たちを得たという物語もこの作品で語られている。

この物語は、後代のババッド文献に影響を与えた。ババッドに分類される作品でこの

時代について触れているほとんどすべての作品が、カンディアワン王とその王子たちに言及している。

すでに明らかなように、この『タントゥ・パングララン』はババッドの諸作品ととりわけ深い関係を持っているが、その理由として、この作品においてムダン・カムラン (Měḍang Kamulan)、ムダン・タントゥ (Měḍang Tantu)、ムダン・パナタラン (Měḍang Panataran)、ムダン・ガナ (Měḍang Gana) の名前の言及があることが挙げられる。

それ以外に特徴的なのは、『タントゥ・パングララン』の物語にみられる思想観が現代のジャワ人の思想観とほとんど変わらないことだ。すでにこの作品では、グル神は全ての神々の父であり、ブラフマー (Brahmā) 神、ウィシュヌ (Wiṣṇu) 神、イーシュワラ神 (Īswara)、マハーデーワ (Mahadewa) 神、シワ (Śiwa) 神は全てグル神の子であるとみなされているのである。

『タントゥ・パングララン』にはまだまだ多くのことが物語られているが、そのすべてを解説には多すぎるので、ここでは、とくに滑稽な物語を取り上げて、その粗筋を示してみよう：

その昔、ダハ (Daha) 国にムプ・タパワンクン (Tapawangkēng) とムプ・タパパレット (Tapapalēt) がいた。<sup>(41)</sup> ムプ・タパワンクンは別名をサムグット・バガンジン (Samēgēt Baganjing) といい、ラクサ (laksa) を食べた代金がツケになっており、西に陽が沈んだ後、必ずツケを払うと約束をした。<sup>(42)</sup> しかしながら彼には約束を果たすだけのお金がなかったので、太陽の動きを止めてしまった。そのため太陽はその場所にとどまって、西に沈むことがなかった。

ちょうどその日、断食中であった王は、陽が沈んだらその日の断食を終わらせ、夕食をとることにしていた。しかしながら太陽は一向に沈まない。王は空腹に耐えかね、このように言ったのであった。「太陽が沈まないとは何事か。わしはひどく空腹だ。」王は事を問いただすために家来を遣わせた。すると問われたムプ・バガンジンは「その問いにお答えするのは大変恥ずかしいことです。実は、私はラクサを食べた代金の支払いを、太陽が沈むまで延ばしてもらっているのですが、なにせお金がないため、太陽の動きを止めてしまったのです。」と答えた。そこで王は彼に支払いのための金を与え、太陽も無事に沈むことができたのだった。<sup>(43)</sup>

太陽を止めてしまうという物語はチベットにも見られ、この『タントゥ・パングララン』の物語と大変に類似している。以下がその物語からの引用である：<sup>(44)</sup>

ある日、僧パドマサンバワ (Padmasambhawa) は大変に喉が渴いていた。<sup>(45)</sup> そこで、葡萄酒の店 (酒屋) に入り、仲間たちと共に満足するまで飲んだ。しかしそこで、お金を持ち合わせていないことに気づいたので、陽が沈むまで支払いを延ばしてもらうように店主に頼み込んだ。店主はそれを快諾したばかりか、パダマサンバワと仲間たちが心ゆくまで飲んでもらうことにした。しかし、この僧は、太陽の動きを止めてしまったのであった。7日7晩の間、太陽はその場所を動くことがなかった。国中の住民はみな困ってしまい、ついに葡萄酒店 (酒屋) の店主は代金の支払いを請求することを諦めたのだった。おかげで太陽は沈み、これ以上眠気に堪えることができなかつた住民たちは喜んだ。

『タントゥ・パングララン』の作者は村落出身の聖職者のように思われる。語られている内容は、当時、口承で伝わっていた民話の類に基づいたものであり、有益なものはいらない。

本作品はTh. ピジョー博士によってラテン文字に翻字、オランダ語に翻訳され、詳しい解説が付されたものが公刊されている (博士論文を出版したもの、Pigeaud 1924)。

### 38 チャロン・アラン<sup>(46)</sup>

この作品は散文で書かれている。以下は物語の粗筋である：

その昔、ムプ・バラダ (Baradah) という名の高僧がいた。この僧にはウェダワティ (Wedawati) という娘がいた。この子は11歳の時に母親に先立たれた。その後、バラダは再婚し、男児をもうけた。しかし、ウェダワティは継母との生活ががまんできず、実母の墓地に行くと、そこから離れようとしなかつた。そこで、その墓地にウェダワティとバラダのために家が建てられ、二人はそこで暮らしていた。

当時、ジャワの地で王位についていたのはアイルランガ王 (Airlangga) であった。

一方、一人の寡婦がおり、その名をチャロン・アランといった。この女はラトナ・マンガリ (Ratna Manggali) という美しい娘といっしょにギラ (Girah) 村に住んでいた。しかし、女は悪名高い黒魔術の使い手であったため、娘に求婚したいという青年は一人としていながかつた。娘の結婚相手がいないことに寡婦は怒り狂い、呪いをかけたので、国中の人々が病気に冒された。朝、病気にかかれば、夜には死に、夜、病気にかかれば、翌朝には死んでいるのであった。

ここにいたって王は、占い師たちを呼び集めて、病気の原因が何か探し出すよう命じた。彼らは、病気の原因はギラ村に住む一人の寡婦の呪いの仕業だと答えた。王は、家

臣に命じて、寡婦を倒すために何人もの兵士をギラ村に遣わしたが、皆、打ち負かされ、死ぬ者も少なくなかった。病気はますます広がるばかりであった。そこで、バラダのもとにこの寡婦を殺すよう王からの命が下った。バラダは、弟子のムプ・バフラ (Bahula) に命じて、寡婦の娘のラトナ・マンガリに求婚させ、彼女を妻にさせた。ムプ・バフラは、ギラ村に住み着いて義母の様子をうかがっていた。ついにバフラはこの寡婦の魔術書を持ち出すことに成功し、それをバラダに手渡した。バラダは自らギラ村に赴くと、寡婦の悪行のすべてを糾弾した後、寡婦を殺害した。するとたちまち病気は消えたのであった。

アイルランガ王は、聖職者になるという決意をかため、二人の息子いずれをも王位につけることを望んだ。つまり、一人はジャワの地の王に、もう一人はバリ島の王にしようとした。バリ島の聖人ムプ・クトゥラン (Kuturan) にそのための許可を得るため、王は使いとしてバラダをバリ島に遣った。しかし、ムプ・クトゥランが許可を与えようとしなかったため、ジャワの地が二分され、その片方が兄に、もう片方が弟に与えられた。その後、年老いた王は、聖職者となってジャティニングラット (Jatiningrat) と名乗った。

バラダがバリに向かう時、バニユワンギ海峡を渡るために、パンノキの葉に乗って渡った。<sup>(47)</sup> 帰るときになって、同じ方法を使おうとして、この葉に乗ろうとすると、葉は沈もうとするばかりで、乗ることはできなかった。実はそれは、バラダがムプ・クトゥランへの帰りの挨拶を怠っていたせいであった。バラダはクトゥランのところへ戻って、果たすべき事を果たした後、パンノキの葉に乗って、海峡を西に渡ることができた。

時を経て、アイルランガ王の二人の息子たちは国の境界をめぐる争いを始めた。王の命令でムプ・バラダが仲裁に入り、二つの王国の境界線を確定させた。

一枚の葉に乗って海を渡る聖者の物語はチベットにも存在する。<sup>(48)</sup> 大乘仏教の教祖ナーガールジュナも同様に、インドの地から遠く離れた島へ向かう際に、葉に乗って海を渡った。また、インドの地に戻る際にも、葉に乗っていった。

ムプ・バラダがジャワの地を二分し、海を渡ってバリへ行ったという出来事は『ナーガラクルターガマ』の第68詩章、1節、2節、3節中にも見られる。

『パララトン』の中にも、サン・ヒャン・ロガウェ (Sang Hyang Lohgawe) がジャワからインドへ向かう時に、*roning kakatang tĕlung tugĕl* (3枚のカカタンの葉) に乗って渡った、という記述がある。<sup>(49)</sup>

なお、『チャロン・アラン』の作者については不明である。また、成立年代についても不明である。ただ明らかなのは、中期ジャワ語の時代に成立した作品だということのみである。この作品はBijdragen Kon. Inst. v. Ned. Ind. 1926年版の中で、ラテン文字に翻字されオランダ語の翻訳をつけて公刊されているほか、現代ジャワ語版がバライ・プスタカに収蔵されている。

### 39 タントリ・カーマンダカ<sup>(50)</sup>

この作品にはカンチル (kancil、豆鹿) 物語のような、動物寓話が数多く収められている。また、作品の源流は、インド起源のサンスクリット語で書かれた寓話集『パンチャタントラ』(Pañcatantra) である。この原作の物語はすでに古い時代からジャワに受容されていた。

この作品は、『パンチャタントラ』とは若干の相違がある。相違は(枠物語の)冒頭部にある。『パンチャタントラ』は愚かな息子たちを持つある王の物語から始まる。その息子たちの教育を王に命じられた僧が、動物たちの寓話を彼らに語って聞かせるのである。それに対して、『タントリ・カーマンダカ』の冒頭部は、千夜一夜物語の冒頭部と類似している。以下がその物語である：あるところに毎晩のように、純潔の若い娘を所望する王があった。ついには、国中で王の手の付いていない若い娘は、宰相の娘タントリ一人を残すことになった。王に自らを捧げることとなったタントリは、その前に物語を語らせてほしいと王に頼んだ。物語を語り終えると、話があまりに美しかったので、王はさらに一つ物語を語るよう彼女に懇願した。このようなことをしているうちに、結局タントリには王の手がつかずに済んだ。毎晩若い娘をほしがる王の欲望も治まってしまった。このほかにも多くの物語が本作品に収められているので、ここでは、結末部の物語のみを引用する。以下がその内容である：

アリダルマ (Aridarma) という偉大な王がいた。ある日、王が森へ狩りに出かけたところ、蛇族の姫が一匹の下賤の蛇と巻付き合っているところに遭遇した。王は心の中で、このように思った。「おまえの行為はなんとおぞましいことだろう。蛇族の姫よ。おまえは蛇族の姫でありながら、なぜ下賤の蛇と低劣な行為にふけるのか。これは王族としての規則を破っている。これは望ましい行為ではない。私はおまえに対する義務を避けることはできない。なぜなら、私は(王として人々の上につ)長であるとともに(義務に仕える)下僕でもあるからだ。いったいおまえの考えていることはどういうことな

のだ？このような行為は間違いだ。」王はこのように言った。そして、下賤の蛇を殺すと、蛇族の姫を殴打した。

傷心した蛇姫は蛇の王国に戻ると、父である蛇王のもとに泣きながら参上した。

蛇王は尋ねた。「ああ私の子よ、おまえはいったい何故そんなに泣いているのだ。」

姫はこのように答えた。「お父様、森へ狩りにやってきた王がおりました。その名はアリダルマとのこと。私を見ると立ち止まって、私にしつこく迫ってきました。私は拒みましたが、欲望に身を任せた王に、私は暴行されそうになりました。私が逃げると、その王は後を追ってきたのです。そして私を殴り、暴力を振るったので、私は泣いているのです。」

蛇王はこう答えました。「娘よ、落ち着きなさい。この父がアリダルマとやらを殺してきてやるから、しばらく待っていなさい。さあ、心の動揺を静めなさい。」

すぐさま蛇王は、バラモンに姿を変えて、アリダルマ王の宮殿へ向かった。宮殿の中に入ると、姿を再び蛇の姿に戻した。体はとても小さくして、寝床の下に潜んだ。

そのとき折しも、王は王妃のマヤワティ（Mayawati）と共に寝床で休んでいた。王がなぜか浮かぬ顔をしていたので、王妃は「王様、いつもと様子が違っておられますが、何故でしょうか」と尋ねた。

王妃に王はこのように答えたのだった。「先ほど森へ狩りに出かけたときに、道徳に反した行いをしている蛇姫を見たのだ。信じがたいことだが、その姫は下賤の蛇と巻き付き合っていたのだ。道から外れた行為ではないか。バラモンの娘がスードラの男と結ばれるようなものだ。この世の掟を破るもの、王族の掟を破るものだ。本来ならバラモンの娘はバラモンと結ばれるべきだというものを。もし仮に、くだんの蛇姫が蛇王の娘という身分でなかったのならば、その行いは問題にならない。しかしながら、蛇姫という立場にある以上、普通の蛇と結ばれてはならないのだ。そういうわけで、私は、その下賤の蛇を殺し、蛇姫を殴ってしまったのだ。」

ベッドの下で王の言葉を聴いていた蛇王はこう思ったのであった。「何としたことか。私の娘こそが道から外れた行いをしていたのだ。私の娘がかくまでもふしだらであったとすれば。しかして、この王は立派な王であり、世の中の汚れを取り除き、悪しき性根を持つ者をことごとく根絶やしにするという、王としての使命を果たすことに心を尽くしておられる。」こう考えた蛇王は、ベッドの下から這い出て、再びバラモンに姿を変えた。

王はこのバラモンを温かい言葉で迎え、それに対してバラモンも丁重に言葉を返した。「私めは、陛下が先ほど行いの悪さを見かねて殴ったという雌蛇の父親でございます。陛下がそのような道にはずれた行為に罰を下すのは当然のことと存じます。今回のことでは、私めは大変にうれしく思っておりますから、陛下の望むものは何なりと私めにお申し付けください。」王は「私は、動物たちの話が理解できるよう、すべての動物たちの言葉を知りたく思う。」と答えた。

蛇王は「陛下、心得ました。どうかご心配なさらず。その知識をお授けしましょう。ただ一点、私めが陛下にお願いしたいことがあります。どうか、その知識を他の者には与えませぬよう。もしも他の者にお与えになれば、陛下の命は失われましょう。」こうして、王に伝えるべきことを伝える終わると、蛇王は地底へと帰って行った。

アリダルマ王は宮殿に留まっていた。ある日のこと、王がいつものように王妃と共に寝床で休んでいると、王の寝床の上に雌のヤモリがいた。そのヤモリは独り言を言った。「ああ、王が奥様に接するように、私も甘い言葉でねんごろに接してもらいたいわ。本当に、私とはまったく違うわ。私の夫なんて私を愛もしないし、相手にもしてくれないし、かといって離婚もしないでほったらかしにしているのに。」と言うのであった。

この言葉を聞き、王は微笑んだ。そこで王妃が「おやまあ、陛下。どうされたのかしら。陛下はなぜお笑いになったの。」と尋ねた。

これに対し王は「なんでもないよ。おまえ。ただ笑いたくなっただけだ。」と応じ、本当のことを告げようとはしなかった。

マヤワティ王妃は問いただした。「そんな、陛下。どうか私に教えてくださいませ。」

「それはできない。おまえ。それをおまえに告げたら私の命はないのだ。」

王妃は答えた。「でしたら、陛下。わたくしが死んだほうがましですわ、あなたさまが本当のことを教えてくださらないのなら」。

「よしわかった。王妃よ。そなたがそれほどまでに知りたいというのなら、火葬のための台を用意するよう命じなさい。もうこれまでじゃ。火葬台に、足場も揃えて、供物も用意するよう命じるのじゃ。家臣らに命じるのじゃ。」

火葬台が用意されると、アリダルマ王は、僧侶やバラモンや聖人たちのために、布施を施した。宮殿中の財宝を集め尽くして、布施として寄進したのである。

火葬台の火が燃え盛ると、王と王妃は手をつなぎあって足場に登った。王と王妃が足場の上にいるとき、藪の中から雄と雌の2匹の山羊が出てきた。雌山羊の名はウィウィ

タ (Wiwita)、雄山羊の名はバンガリ (Banggali) という。二匹はさきほどの火葬台に近づいた。その時、雌羊はこういったのであった。「あなた、火葬台の近くにあるあの黄色いジャヌル (janur) をとってきてよ。<sup>(51)</sup> あれを食べたいわ。きつこの悪阻 (つわり) も少しは和らぐはずだわ、さあ、急いで、お願い。」

すると雄山羊はこう答えた。「何を考えているのだ。そんなことは無理だとわからないか。見てみなさい、焼き場の周りには守衛たちが立っているし、皆、武器をもっているではないか。矛もあるし、剣もあるし、槍もある。いったいおまえはどうしたいというのかい。」

雌山羊はこう答えた。「わかったわ。あなたは私を愛してなんかいないのね。わたしのこの望みが叶えてもらえないのなら、死んだほうがましよ。」

雄山羊が言った。「死にたいのなら、死ねばいい。おまえが死ねば、私だって心を悩ませることはなくなる。私は、王妃の願い事に何でも応えようとする、アリダルマ王のようにするつもりはまったくない。あのようなことはいやだ。あのような姿は、勇敢な男の姿ではない。本物の男なら、当然こう言うだろう。「愛するのもしよ。愛さないのもしよ。」と。この私を見なさい。動物の姿でしかない。しかし、あのような振る舞いはしようと思わない。おまえは自分の願望をこの私に叶えさせようというのか。」

バンガリはこのように言って、女房山羊を罵った。バンガリの言葉はアリダルマ王にも聞こえていた。突然、王は自らの過ちに気づき、心の中でつぶやいた。

「この雄山羊の言っていたことは真っ当だ。このようなことをしている限り、私は実にあさましい。山羊の考えにさえ及んでいなかったのだ。確かに、あの雌山羊の言ったことは理にかなっていない。」

王はこのようにも感じた。「動物でさえ、女房の欲求に即座に従おうとはしない。私は王であるにもかかわらず妻に負かされているとすれば、誰がこんな王を尊敬するだろうか。老いぼれた山羊のバンガリでさえも女房の要求に従うことはないのに。」このように王は心の中で思ったのだった。

そして王は足場から降りた。山羊のバンガリの言葉を鑑みてのことであった。火の中で死ぬことはなかった。すでに分け与えられた布施の品々は、王自身の安寧と王国の存続のための布施としてそのまま与えられた。一方の王妃マヤワティは火の中に身を投げ、雌山羊もそれに続いた。

この比較的長い物語をここで紹介したのは、のちほど他のいくつかの作品の解説を容



易にするためである。

この作品『タントリ・カーマンダカ』の中にはサンスクリット語の語句が挿入されている。その中のいくつかは本来の形に修復が可能であるが、それ以外のものは不可能である。したがって、この点から言えば、この作品は、散文で書かれた古層の古ジャワ語文献に分類されるとみなされるかもしれない。しかし、現代の語形があることから判断すると、中期ジャワ語文献に分類するしかない。

この『タントリ・カーマンダカ』はすでにBibliotheca Javanica第2巻として、C. ホーイカース博士によるオランダ語の翻訳を付して出版されている。

#### 40 コーラワーシュラマ<sup>(52)</sup>

この作品は散文で書かれている。構成は、これまでに述べた散文の作品、たとえば『アーディ・パルワ』(本書7番)、『ウィラータ・パルワ』(本書9番)などと類似している。しかし、成立年代について言えば、『タントゥ・パングララン』(本書37番)と同じか、もしくはそれよりもさらに新しいと判断してよい。これは言語的作成性が目に付くことを根拠とすることができる。『バーラタユッダ』(本書22番)や『タントゥ・パングララン』(本書37番)などからの引用が数多くみられるからである。しかし、どうやらこれらの引用は口承に基づいているようである。

もう一点、この作品が『タントゥ・パングララン』よりも新しい作品とされる根拠となる明白な特徴は、『コーラワーシュラマ』のなかで、グル(Guru)神の別名であるサン・ヒャン・パラメーシュワラ(Sang Hyang Parameśwara)よりも上位の神としてサン・ヒャン・タヤ(Taya)という神が言及されていることである。「タヤ」という言葉はジャワ語本来の語で、「不存在」を意味し、スンダ語では *teu aya* にあたる。つまり、土着のジャワ人の神を示す語である。サン・ヒャン・ウナン(Wenang)やサン・ヒャン・トゥンガル(Tunggal)についても同様である。この二つの語もジャワ語本来の語であり、「至高神」を指し示す語として適切である。

ジャワ・ヒンドゥーの最盛期には、ジャワ人の土着の神は、マハーデーワ神、パラメーシュワラ神といった名前を持ち、のちにはグル神と呼ばれるようになったインド人の主神によって周辺化されてしまったと考えられる。<sup>(53)</sup> その後イスラームの時代が到来すると、グル、サン・ヒャン・トゥンガル、サン・ヒャン・ウナンの神々は預言者アダムの下に位置付けられた。このような経緯を経て、現在のジャワ人のワヤンの神々やサ

ン・ヒャン・ウナン、サン・ヒャン・タヤなどの神々に対する思想が生み出されたのである。

また、このほかにも『コーラワーシュラマ』が新しい作品であることを示す特徴がある。それは、古ジャワ語の語句の中に挿入されているサンスクリット語が見かけだけのサンスクリット語もどきだということである。実際には、ジャワで作られたサンスクリット語が本来のジャワ語と混じり合っているのである。例えば、Wyasa lawadaという表現があり、これは「聖者ウィヤーサが訪問する」という意味である。Lawadという語は、tilikと同意語で、「訪問する」という意味の本来のジャワ語である。<sup>(54)</sup> この語からサンスクリット語もどきのlawadaという語が作られたのである。この種の表現はこれ以外にも数多く存在している。

また、『コーラワーシュラマ』の内容は大変に多様で、哲学などに関する事柄が織り込まれている。その内容の要点は以下のとおりである。:コーラワ兄弟がパランダワ兄弟に復讐するという物語が語られることになった。そこで聖者ウィヤーサに対して、コーラワとその仲間を生き返らせるよう懇願がなされた。このようにして生き返ったコーラワ兄弟たちであったが、結局のところ、恨みを晴らす前に物語は終わってしまう、というものである。

『コーラワーシュラマ』は、J. L. スウェレンフレーベル博士によって、ラテン文字に翻字され、詳細な解説とオランダ語翻訳が付されたものがすでに出版されている(1936年)。

#### 41 パララトン<sup>(55)</sup>

この作品も散文で書かれている。前半は主としてケン・アンロック (Kèn Angrok) の生誕から逝去までの生涯についての記述である。<sup>(56)</sup>

物語によると、ケン・アンロックはこの世に生を受ける前から神秘的な存在であったと言ってよいだろう。成長すると彼は大変な悪人になった。そしてついには、ランガ・ラージャサ (Rangah Rājasa) 王として、のちにシンガサリ (Singhasari) 王国となるトゥマプル (Tumapël) 王国の王位についた。さらに、追加の称号としてスリ・ギリンドラタナヤジャ (Śrī Girīndratana yaja) とも呼ばれた。

このケン・アンロックはマジャパヒト王国の諸王の先祖であるといえる。そのため、本作品の後半ではマジャパヒト王国の勃興から滅亡前までの記述がある。

ケン・アックロックを別にすると、ラデン・ウィジャヤ (Radèn Wijaya) についてもかなり長く語られている。彼が苦難の人生を経てマジャパヒト王国初代の王となるまでの物語である。もちろん、『パララトン』の中で明らかにされていることの多くは信用に値するものであるが、『ナーガラクルターガマ』(本書29番) やマジャパヒト時代の石碑や銅板に記されたことと比較すると、疑うべきところが多い。したがって、本書が出版された頃と比べると、現在の作品の価値は下がっている。

この作品はこれまでに二度、ブランデス博士によりラテン文字の翻字にオランダ語の翻訳と詳細な解説を付して、出版されている。初版はVerhandelingen Bat. Gen. 第49巻として刊行され、第2版はクロム博士による訂正と補足が加えられたものが同じく第62巻として刊行されている。

また、現代ジャワ語への翻訳がR. M. マンクディメジャ (Mangkudimeja) によってなされているが、これは、訳者自身の理解にのみ基づいた翻訳である。これはバライ・プスタカ (Balai Pustaka) から出版されている。<sup>(57)</sup>

## 註

- (1) 原語はジャワ語で *lĕlewaning basa*、インドネシア語で *lenggang bahasa* である。解釈が難しい表現であるが、ここでは、読者の気を引かんがための「(あざとい技巧的な) 作為性」と理解しておく。
- (2) 原題は *Brahmāṇḍapurāṇa*。カカウイン版と散文版ともにテキストとオランダ語訳 (Gonda 1932, 1933) と英訳 (Phalgunadi 2000) が刊行されている。
- (3) 第1編では『ブラフマーンダプラーナ』と表記していたが、プラーナ文献であることを明らかにするため、本編以降は『ブラフマーンダ・プラーナ』と表記する。
- (4) 原題は *Kuñjarakarna*。テキストとオランダ語訳 (Kern 1901) とテキストと英訳 (Teuw and Robson 1981) が刊行されている。
- (5) 原題は *Nāgarakṛtagama*。ただし、この題名は後代の写本作成者が与えた名称であり、原作者プラパンチャが付けた題名は『デーシャワルナナ』(*Deśawarṇana*) である。現在はこの本来の名称で知られている。これまで19世紀にロンボク島で発見された写本が唯一のテキストであったが、20世紀になってバリ島でも写本が発見された(青山 2016)。ロンボク島の写本に基づくテキストと英訳と詳細な注釈 (Pigeaud 1960-64) およびバリ島で発見された写本に基づく英訳 (Robson 1995) が刊行されている。
- (6) 「若い雄鶏」を意味するハヤム・ウルクは幼名で、即位名はラージャサナガラ (*Rājasanagara*) 王である。この王の治世下、宰相ガジャ・マダ (*Gajah Mada*) の采配のもとマジャパヒト王国は繁栄した。
- (7) 共食儀礼とは、個人や共同体の安寧を願って集団で行われる儀礼的食事のことで、インドネシア語ではスラマタン (*selamatan*) と呼ばれる。
- (8) ババッド (*Babad*) は、イスラーム時代にジャワ語の散文または韻文で書かれたジャワに関する年代記の総称。本書の第7章で主要作品が取り上げられている。
- (9) ムプ (*mpu* または *ĕmpu*) は古ジャワ語で宮廷詩人などに対する敬称である。宮廷詩

- 人は現代ジャワ語ではプジャンガ (pujangga) と呼ばれる。
- (10) 『ナーガラクルターガマ』によれば、プラパンチャは父から仏教監督官の役職を世襲したようである。しかしながら、テキストには著者の父の名は言及されていない。プラパンチャの父をナーデンドラとするのは、同時代の刻文に見えるナーデンドラをプラパンチャの父と推測したピジョーの研究に基づいている (Pigeaud 1962: IV, 342)。
- (11) ケルンによるテキストとオランダ語訳 (Kern 1905-1914) および、これにクロムの注解を加えた増補版 (Kern 1919) のことを指している。
- (12) 原題は Arjunawijaya。テキストと英訳が刊行されている (Supomo 1977)。
- (13) 「千本の腕を持つアルジュナ」を意味するアルジュナ・サハスラバーフは、『マハーバーラタ』に登場するパランダワ兄弟のアルジュナとは別人なので注意を要する。
- (14) 原題は Sutasoma。別名は「調伏された人食い」を意味する Puruṣādaśānta。テキストと英訳 (Soewito Santoso 1975) および研究書 (O'Brien 2008) が刊行されている。
- (15) プルシャーダは「人食い」(Puruṣāda) の意。「斑模様の足」を意味するカルマーシャパーダ (Kalmāśapāda) は、『スタソーマ』の淵源なった仏教系説話に登場する名前であって『スタソーマ』で使われている名前ではないから、プルシャーダの別名とするのは原書の誤解である。
- (16) 『スタソーマ』の原文には豚は出てこない。
- (17) アムリタ (amṛta) はインド神話で語られる乳海攪拌から出現した不死の霊水。
- (18) 原書では「ガルンカー (Ngalēngkā) 国」となっているが、『スタソーマ』の原文に従い「シンハラ国」に訂正した。ガルンカーはルンカー (Lēngkā) とともに表記され、スリランカを指す。
- (19) 『スタソーマ』と仏教文献の関係については青山 (1986) を参照。《原註》詳しくは Kern, *Verspreide Geschriften*, vol. 3, p. 121; vol. 4, p. 149 を参照。
- (20) 原題は Parthayajña。本書は『マハーバーラタ』の第2巻「集会の巻」の出来事を前提にして、第3巻「森林の巻」に取材している。第2巻では、コーラワ兄弟はハースティナの都、パランダワ兄弟はインドラプラスタの都に分かれて統治していたが、パランダワの繁栄を妬んだコーラワは、サイコロの達人である伯父シャクニと謀ってパランダワの長男ユディシュティラをサイコロ賭博に誘い、全財産を奪い尽くす。このとき、パランダワの妻ドローパディーがコーラワの次男ドゥッシャーサナによって辱めを受ける。両者はいったん和解するが、敗者は12年間、森に隠れ住み、13年目は誰にも知られず暮らして初めて帰還できるという条件で再びサイコロ賭博が行われ、ユディシュティラは再び負けてしまう。第3巻では、パランダワたちが森林を流浪するなか、一人アルジュナは修行の旅に出る。
- (21) 前の訳註にあるように、ドローパディーがシャクニに辱められたという原書の記述は不正確である。
- (22) 「繁栄の象徴」と訳した部分は原文では「ワユヒ」(wahyu) である。ワヒユはイスラームにおける「神からの啓示、天啓」を意味するが、ジャワでは、「輝く光の球」として表象され、国が減びるときワヒユが飛び去ると語られる。イスラーム期のジャワ語文献におけるワヒユ表象の原型が古ジャワ語文献に見られる点は興味深い。
- (23) 《原註》オランダ語による粗筋は *Tijdschrift. Bat. Gen.*, vol. 48 に掲載。
- (24) 現存する古ジャワ語文献に大幅な後代の改竄があったとするのはプルボチャロコ独自の見解であり、現在の学界の定説ではない。Zoetmulder (1974: 60-67) を参照。
- (25) 原題は Nitiśāstra。テキストとオランダ語訳に注釈を付したものが刊行されている (Poerbatjaraka 1933)。
- (26) カポック (学名 *Ceiba pentandra*) は熱帯の落葉高木。実からは綿が採られる。

- (27) 『ウィタラディヤ』は19世紀のジャワの宮廷詩人ロンゴワルシトの作品。《原註》Manuscript Bat. Gen., no. 649, p. 95.
- (28) ロンゴワルシト(1802~73年)はスラカルタ宮廷の詩人で、古典ジャワ時代の最後を代表する文学者。本書の第7章で取り上げられている。
- (29) 原題はNirartha Prakṛta。テキストとオランダ語訳が刊行されている(Poerbatjaraka 1951)。
- (30) 原題はDharmaśūnya。インドネシア語による研究書が刊行されている(Dharma Palguna 1999)。
- (31) メール(Meru)山またはスメール(Sumeru)山はインドの神話的世界観において世界の中心に位置し、山頂に神々の世界を有する山である。このテキストでは山自体がシワ神と同一視されている。ジャワ語のカサル(kasar)とアルス(alus)は、それぞれ「粗野で、物質的な」属性と「洗練された、玄妙な」属性を意味し、対をなして、ジャワ神秘思想の基本となる重要な概念である。
- (32) バリ島の最高峰であるアグン(Agung)山は、メール山とみなされている。
- (33) チャンドラ・サンカラ(candra sangkala)はスンカラ(səngkala)とも表記され、しばしば「スンコロ」と読まれる。あらかじめ定められた数値を表す単語をいくつか組み合わせることによって年号を表す方法である。数値は一の位からより高い位の順に表記される。また組み合わせた単語はしばしば意味のある文を構成する。第1編の註79を参照。
- (34) 原題はHariśraya。別名Ariśraya。
- (35) スマリの娘の子が『ラーマヤナ』に登場するラーヴァナである。
- (36) 本書では『ハリシュラヤ』をもっとも新しい古ジャワ語作品とするが、実際にはマジヤパヒト王国が滅亡し、ジャワがイスラーム化した後も、バリでは古ジャワ語のカカウインが書かれている。たとえばCreese(1998)を参照。
- (37) 古ジャワ語は英語でOld Javanese、中期ジャワ語はMiddle Javaneseと呼ばれる。言語的な違いのほかに、古ジャワ語の韻律詩がインドの韻律の影響を受けたカカウイン(kakawin)であるのに対して、中期ジャワ語の韻律詩はジャワ土着の韻律に基づくキドゥン(kidung、原書第5章で扱う)である点が大きな違いである。
- (38) 原題はTantu Panggëlaran。テキストとオランダ語訳が刊行されている(Pigeaud 1924)。
- (39) スメル(Sumeru)山またはメール(Meru)山はインドの神話的世界観において世界の中心に位置し、山頂に神々の世界を有し、世界の中心に位置する山。漢訳仏典では須弥山の名で知られる。
- (40) ラウ(Lawu)山、ウィリス(Wilis)山、クルッド(Kelud)山、カウイ(Kawi)、スメル(Semeru)山はいずれもジャワ島東部に実在する標高1000メートルを超える火山である。なかでもスメル山は標高3,676メートルを誇るジャワ島の最高峰である。ただ、クムクス(Kemukus)山は同名の地名が中ジャワに存在するが、これらと比肩するような火山ではない。
- (41) 《原註》タパパレットの名は、ワヤン・グドッグ(wayang gedog)ではパレット(Palet)になっている(ワヤン・グドッグはジャワのパンジ王子を主人公とする人形影絵芝居のこと)。
- (42) 《原註》ピジョー(Pigeaud)博士は「ラクサ」(laksa)を「千」と訳しているが、ここで、ラクサとは何らかの飲食物を指している。ジャカルタには今でもラクサという名のカレーに似た料理が存在する。
- (43) 《原註》Dr. Th. Pigeaud, Proefschrift, Leiden, 1924, p. 118.
- (44) 《原註》The Buddhism of Tibet or Lamaism: with its Mystic Cult, Symbolism and Mythology, L. A. Waddell, London, 1859, p. 382.

- (45) 《原註》パドマサンバワはチベットに大乘仏教を導入した高僧である。
- (46) 原題は *Calon Arang*。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Poerbatjaraka 1926)。
- (47) パンノキ (学名 *Artocarpus communis*) は常緑の高木。ジャックフルーツに似たデンブンの多い実がなるため「パンの木」の名で知られる。インドネシア語で *sukun*、ジャワ語で *kluwih*。
- (48) 《原註》 *Mythologie des Buddhismus in Tibet und der Mongolei*, Von Albert Grünwedel, Leipzig, 1900, p. 31.
- (49) 《原註》 *Pararaton*, 第2版, p. 12.
- (50) 原題は *Tantri Kāmandaka*。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Hooykaas 1931)。
- (51) ヤシの若葉で作った飾り物。
- (52) 原題は *Korawāsrama*。テキストとオランダ語訳が刊行されている (Swellengrebel 1936)。
- (53) 《原註》その後インドの影響が少なくなるとジャワ土着の神が再び現れ、グル神の上に位置付けられた。
- (54) 原文は「*Lawada* という語は、*tilik* と同意語で、「訪問する」という意味の本来のジャワ語である。」になっているが、文の趣旨から「*Lawada*」を「*Lawad*」に訂正して訳した。
- (55) 原題は *Pararaton*。ブランデスによるテキストとオランダ語訳の初版 (Brandes 1896) とクロムによる改訂が行われた第2版 (Brandes 1920) およびテキストと英訳 (Phalgunadi 1996) が刊行されている。
- (56) 歴史的な人物としてのケン・アロックについては不明な点が多い。1222年にクディリ王国を破ってトゥマプルの地 (現在の東ジャワのマラン周辺) にシンガサリ王国を建国したとされる。即位名はラージャサである。ケン・アロック (Ken Arok) とも表記される。
- (57) インドネシアの国営出版社。「図書局」の意で、当初は1917年にオランダ植民地政府によって設立された。

## 参考文献 (第4章と第5章に関連する文献)

### 使用されている略語一覧

|     |  |
|-----|--|
| BI  | Bibliotheca Indonesica   |
| BJ  | Bibliotheca Javanica   |
| BKI | Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde |
| VBG | Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. Batavia.                      |
| VG  | Verspreide Geschriften (Kern 1917-1922)  |
| VKI | Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde                               |

### 青山 亨

- 1986 「古代ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24 (1), pp. 3-17.
- 2016 「デーシャワルナナ」『名著で読む世界史120』山川出版. (近刊)

### Brandes, J. L. A.

- 1896 *Pararaton (Ken Arok), of het Boek der Koningen van Tumapël en van Majapahit*. VBG 49.
- 1920 *Pararaton (Ken Arok)*. 2nd ed. revised by N. J. Krom. VBG 62.

### Creese, Helen

- 1998 *Pārthāyaṇa: The Journeying of Pārtha: An Eighteenth Century Balinese Kakawin*. Leiden.

- Dharma Palguna, Ida Bagus Made  
 1999 *Dharma Sūnya: Memuja dan Meneliti Śiwa*. Denpasar.
- Gonda, J.  
 1932 *Het Oud-Javaansche Brahmāṇḍa-Purāṇa: Prozatekst en kakawin*. BJ 5. Bandoeng.  
 1933 *Het Oud-Javaansche Brahmāṇḍa-Purāṇa, vertaald door—*. BJ 6. Bandoeng.
- Hooykaas, C.  
 1931 *Tantri Kāmandaka: Een Oudjavaansche Pancatantra-bewerking in tekst en vertaling uitgegeven*. BJ 2. Bandung.
- Kern, H.  
 1901 *De legende van Kuñjarakarna: Volgens het oudst bekende handschrift, met Oudjavaanschen tekst, Nederlandsche vertaling en Aanteekeningen*. VG X, pp. 1-76.  
 1905-14 *De Nāgarakṛtāgama*. VG VII, pp. 249-320; VG VIII, pp. 1-132.  
 1919 *Het Oud-Javaansche lofdicht Nāgarakṛtāgama van Prapañca: Tekst, vertaling en bespreking, met aanteekeningen van Dr. N. J. Krom*. Den Haag.
- O'Brien, Kate  
 2008 *Sutasoma: The ancient tale of a Buddha-Prince from 14th century Java by the poet Mpu Tantular*. Bangkok.
- Phalgunadi, I Gusti Putu  
 1996 *The Pararaton: A Study of the South-East Asian Chronicle*. New Delhi.  
 2000 *The Indonesian Brahmāṇḍapurāṇa*. New Delhi.
- Pigeaud, Th. G. Th.  
 1924 *De Tantu Panggĕlaran: Een Oud-Javaansch prozageschrift*. 's-Gravenhage.  
 1960-64 *Java in the 14th century: A study in cultural history*. 5 vols. The Hague.  
 1967-80 *Literature of Java: Catalogue Raisonné of Javanese Manuscripts in the Library of the University of Leiden and Other Public Collections in the Netherlands*. 4 vols. The Hague.
- Poerbatjaraka, R. M. Ng.  
 1926 *De Calon Arang*. BKI 82, pp. 110-180.  
 1933 *Nītiśāstra: Oud-Javaansche tekst met vertaling*. BJ 4. Bandoeng.  
 1951 *Nirartha-Prakrĕta*. BKI 107, pp. 201-225.
- Robson, S.  
 1995 *Deśawarṇana : (Nāgarakṛtāgama)*. VKI 169. Leiden.
- Soewito Santoso  
 1975 *Sutasoma: A Study in Javanese Vajrayana*. New Delhi.
- Supomo, S.  
 1977 *Arjunawijaya: A Kakawin of Mpu Tantular*. BI 14. The Hague.
- Swellengrebel, J. L.  
 1936 *Korawāśrama: Een Oud-Javaansch proza-geschrift, uitgegeven, vertaald en toegelicht*. Santport.
- Teeuw, A. and S. O. Robson  
 1981 *Kuñjarakarna Dharmakathana: Liberation through the Law of the Buddha. An Old Javanese Poem by Mpu Ḍusun*. BI 21. The Hague.
- Zoetmulder, P. J.  
 1974 *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature*. The Hague.  
 1982 *Old Javanese-English Dictionary*. 2 vols. The Hague.